小さく建て替えられた竪穴の発見

― 草刈遺跡Ｅ区の事例から ―

蜂　屋　孝　之

とても大きな竪穴でした。でもただ大きいだけではなかったのです。いったいそれはどんな竪穴だったのか、それをこれからお話ししましょう。

まず最初にお断りをしておきますが、ここでは、「竪穴住居」という呼び方を使わないようにしたいと思います。それはなぜか。時代によって、また地域によって様々な日常生活の拠点となる「住居」が造られたことは間違いありません。しかし、昔の人達が使っていた竪穴＝住居といった単純な解釈でほんとうによいのかと言えば、それは間違いだというほかはありません。本誌第34号で渡辺修一さんは「竪穴住居」という表現について疑問を投げかけ、集落における多様な目的を持った建築物の一つとして「竪穴建物」という呼び方の方がより適切ではないかと述べています[1)]。ここに取り上げようとしている竪穴は、一般的に「住居」と呼ばれている竪穴とは桁違いに大きさが異なることから、竪穴であることには変わりはありませんが「住居」と呼ぶには相当な違和感があります。いったいどのような目的で建てられ、どんな人達がどのように使っていたのか、それらのことが明らかにされなければ、厳密には「竪穴住居」とすぐに呼んでしまうことには問題があるのです。ここでは、「竪穴」という簡単な呼び方でこのお話を進めていくことにしましょう。それともう一つ、ここでの用語の使い方について以下のように決めておきます。

【建て替え】既存の建物を取り壊して、新しく建物を建設すること。建物の基礎部分も含めて全壊させて別の建物を建てることを「建て替え」と呼ぶ。

【改築】建物の全部または一部を取り壊した後で、引き続いてこれと位置や規模などが著しく異ならない建物を建てることを「改築」と呼ぶ[2)]。

実際には、建物の基礎となる竪穴しか残っていませんから、上屋がどんな形をしていたのかわかりませんが、竪穴に残されていた痕跡からはその用語の違いが見えてくるのではないでしょうか。

大型竪穴が発見された経緯

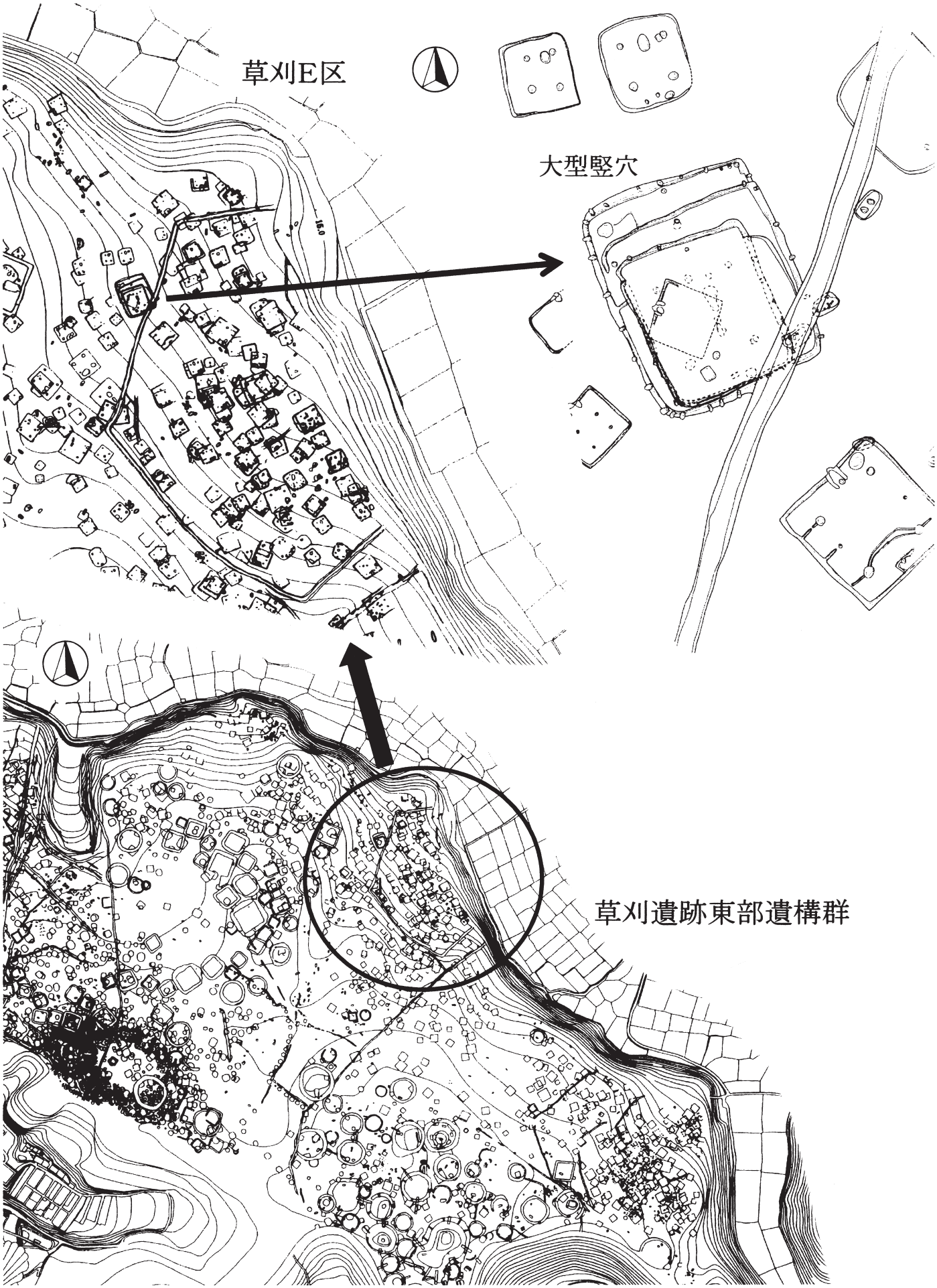
その竪穴は、市原市草刈遺跡のＥ区から発見されました。草刈遺跡Ｅ区については報告書がすでに刊行されていますが、残念ながらこの竪穴については紙面の都合から詳しい報告はされていません[3)]。まずはその竪穴が発見されるまでの経緯についてふれておきましょう。

草刈遺跡は、昭和53（1978）年から区画整理事業に伴って調査が開始された30haにも及ぶ広大な遺跡です。また、千葉県屈指の多様な時代の遺構・遺物を埋蔵した遺跡としても有名です。私が草刈遺跡の地に立ったのは、昭和59（1984）年の立冬を過ぎた頃でした。寒さに慣れてきたとはいえ、朝の冷え込みの方が体の慣れよりも早く、吐く息が白くなる朝も多くなってきたそんな頃でした。

私はこの年、４月から千葉市内の遺跡の調査に入り、４つの遺跡の発掘調査を終えていました。その後、市原市草刈遺跡の大規模な調査へ応援として向かうことになったのでした。応援に行くことになった草刈遺跡では、この年Ｅ区とＦ区[4)]のそれぞれで20,000㎡に及ぶ本調査が行われていたほか、草刈遺跡の東に位置する38,000㎡あまりの川焼台遺跡[5)]の本調査が前年度に引き続き行われていました。私が途中から応援に入ったのがその中のＥ区でした。調査員の小高春雄さんと渡辺修一さんらが、５チーム100人を超える調査補助員の人たちと共に集落跡の調査に挑んでおり、その調査も佳境に入っていた頃でした。

草刈Ｅ区は、第１図に示したように草刈遺跡の北側の谷津に面する斜面に位置しています。本報告では、古墳時代前期から後期にかけての竪穴178棟、奈良・平安時代の竪穴19棟、合計197棟あまりの竪穴が報告されています。

私が応援に入った頃、台地平坦面から開始されたＥ区の調査は、半分以上の竪穴の調査を終え、北側に傾斜した斜面部に展開していました。弥生時代以前から



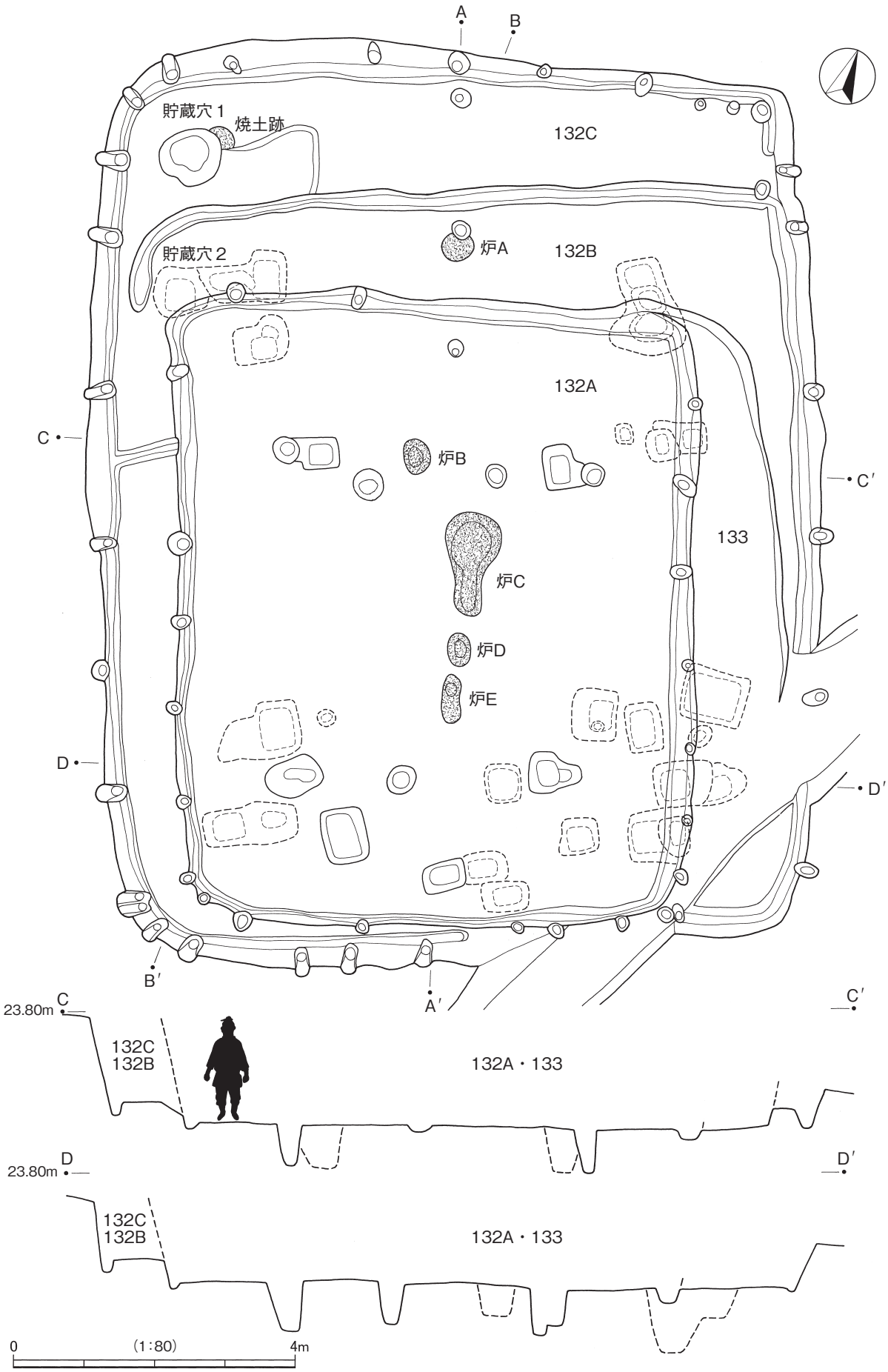
第１図　草刈Ｅ区大型竪穴の位置

写真１　草刈遺跡Ｅ区発見の大型竪穴（北側から見た全景）

の黒味の強い腐植土が斜面に厚く堆積し、古墳時代以降に建てられた竪穴は、この黒色土を掘り込んで建てられていました。竪穴が使われなくなるとその窪地には再びその黒色土が堆積することから、竪穴の形を発見するのがとても困難な状況でした。そのため発掘調査は他の地区に比して慎重に進められていました。小高さんは、斜面中段で発見された134竪穴と名付けられた平安時代の小さな竪穴の調査を終え、さらに周辺黒色土を掘り下げていきました。ところが50㎝、１ｍと掘り下げていっても地山のローム層までたどり着く気配がありませんでした。たぶん小規模な谷が入り込んでいるか、何棟もの竪穴が重なり合っているため、竪穴の存在がわかりにくくなっているのだろうと判断し、先に周辺の竪穴の調査を進めていきました。しばらく経って、休止していたこの区域の調査を渡辺さんが再度やり始めることになりました。やはり掘っても掘っても黒色土ばかりで、重なり合っているらしい竪穴を捉えることができずにいました。ところが掘り始めてから１か月も過ぎた頃に、人工的な壁の一部が確認され、谷頭の一部と見られた場所には、大きな竪穴が重なり合っていることが分かってきたのです。私が応援に行った頃は、ようやくその大きな竪穴の全貌が現れたところでした。渡辺さんからこの竪穴の調査を引き継ぎ、掘り進めていくことになった私は、改めてその大きさに驚かされました。掘り出した土はすでに約100㎥、重さで言えば100ｔを超えていました。竪穴内に堆積していた土の状態を観察するために南北方向に堆積土をベルト状に残してありました。ある日このベルトを詳細に観察していた私は、この竪穴に、あっと驚くような秘密が隠されていることに気づいたのでした。

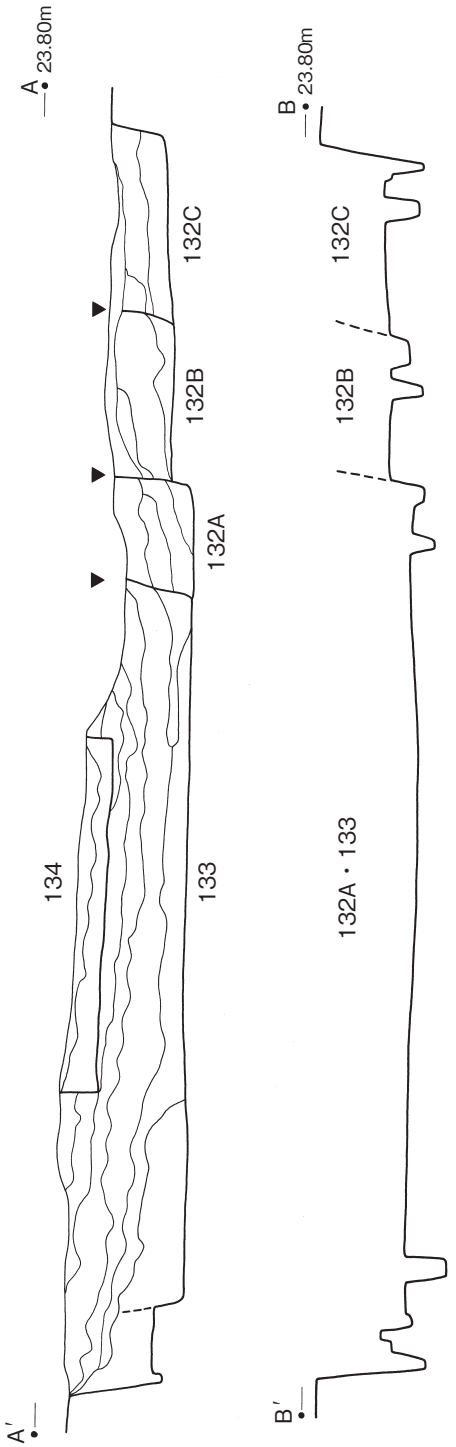
大型竪穴の秘密

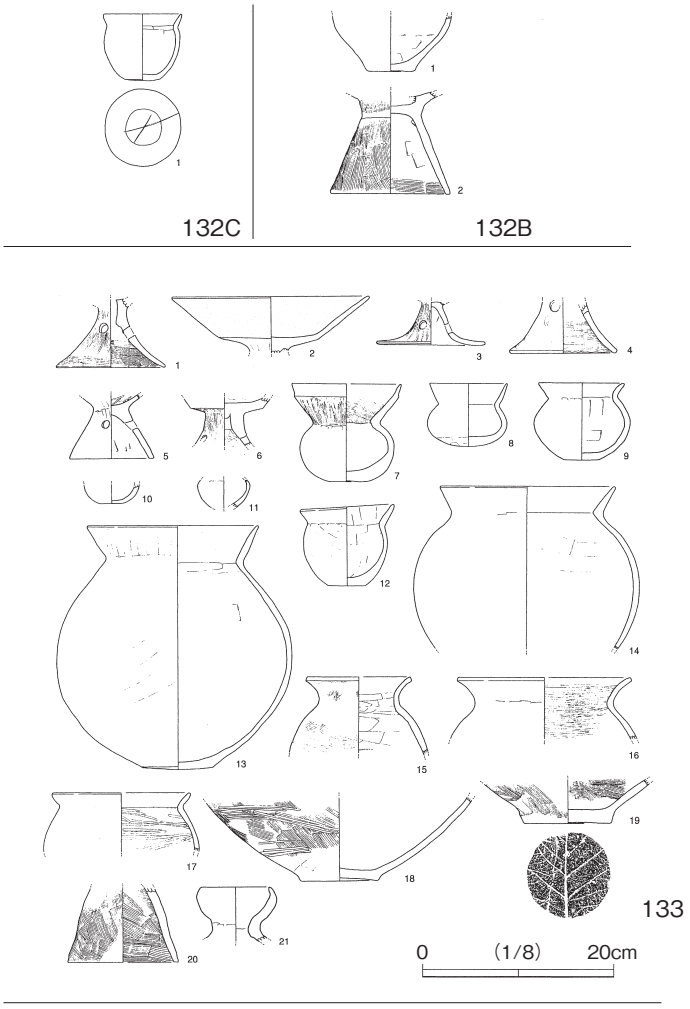
調査が床面に達したとき、この竪穴の床にはいくつかの段差があったため、いわゆる「拡張住居」ではないかと推測されていました。原始・古代の竪穴には建て直しの痕跡が認められる場合が少なくありません。ただし建て直しのほとんどは、柱の入れ替えによる同一規模の「改築」か、４辺のうちのどこか２辺をのばして竪穴を大きくする「建て替え」が多いのです。通



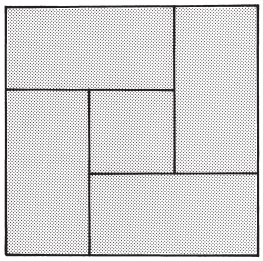
第２図　草刈Ｅ区の大型竪穴

（C－C′の人影は150cmの身長）





第３図　大型竪穴の出土遺物



関東間の４畳半面積
6.97㎡

常私たちは、建て替えて床面積を増やした竪穴を「拡張住居」と呼んでおり、この大型竪穴もまさにこの拡張住居と思われたのです。ところが、土層断面を見た私は、床面の段差がある部分に「壁がある」ことに気がついたのです。あっと驚いたのは、それが「拡張住居」ではなく、それとは反対に入れ子状に小さな竪穴が造られていることを示す壁だったからなのです。この壁は３カ所で確認されました。すでに掘りあげた床面と照合するとその壁は最も大きな竪穴が最初に造られ、次第に小さく建て替えられていったことを示す壁だったのです。最終的には大きさの異なる竪穴が４棟もこの場所に重なりあっていることが判明しました。しかも単に建て替えの時期が異なる竪穴がたまたま建てられたのではなく、互いに強い関連性と連続性をもって建て替えられていったことが判明したのです。ではどのように建て替えられていったのでしょうか。詳しく見ていくことにしましょう。

どのように小さく建て替えられたのか

第２図に掘り上がった時の竪穴の図を示しました。実線で示された穴のほかに点線で示した穴がいくつも認められます。点線で示した穴は床に敷かれた黄色いローム面を取り去った後に発見された、古い竪穴で使われていた柱穴や貯蔵穴、入口ピット（竪穴に外から降りてくるための梯子の下端を埋め込んだ穴）などです。通常竪穴の調査で行われる「床剥がし作業」と呼んでいる作業を行うと、床下に隠されていた古い柱穴などが発見されることがあります。こうして発見された柱穴などは、隠されていた古い竪穴の構造や規模を示しており、当時の建て替えや改築の様子を示すものとして貴重なデータを提供してくれます。残念ながら第２図に点線で示した穴の中には、写真資料を参照したところ、床剥がしの作業を行う前に発見できたはずのものもあるようで、全てが床面下に隠れていたわけではないことがわかりました。各竪穴の規模と床剥がしによって発見された柱穴などの配置などを当時の所見と合わせ、再検討してみました。報告書に記載された竪穴の番号は、最も大きな竪穴が132Ｃ竪穴、一回り小さい竪穴が132Ｂ竪穴、相似形で最も小さいのが132Ａ竪穴です。さらにこの３棟とはやや軸方向を異にする竪穴が133竪穴です。土層断面に認められた壁を根拠として考えられる順番は、132Ｃが最も古く、132Ｂ→132Ａ→133の順に新しくなり、規模を縮小しながら建て替えられていったことは明らかです。それでは、最も古い竪穴から順に見ていくことにしましょう。第４図にその建て替えの変遷を示してみました。

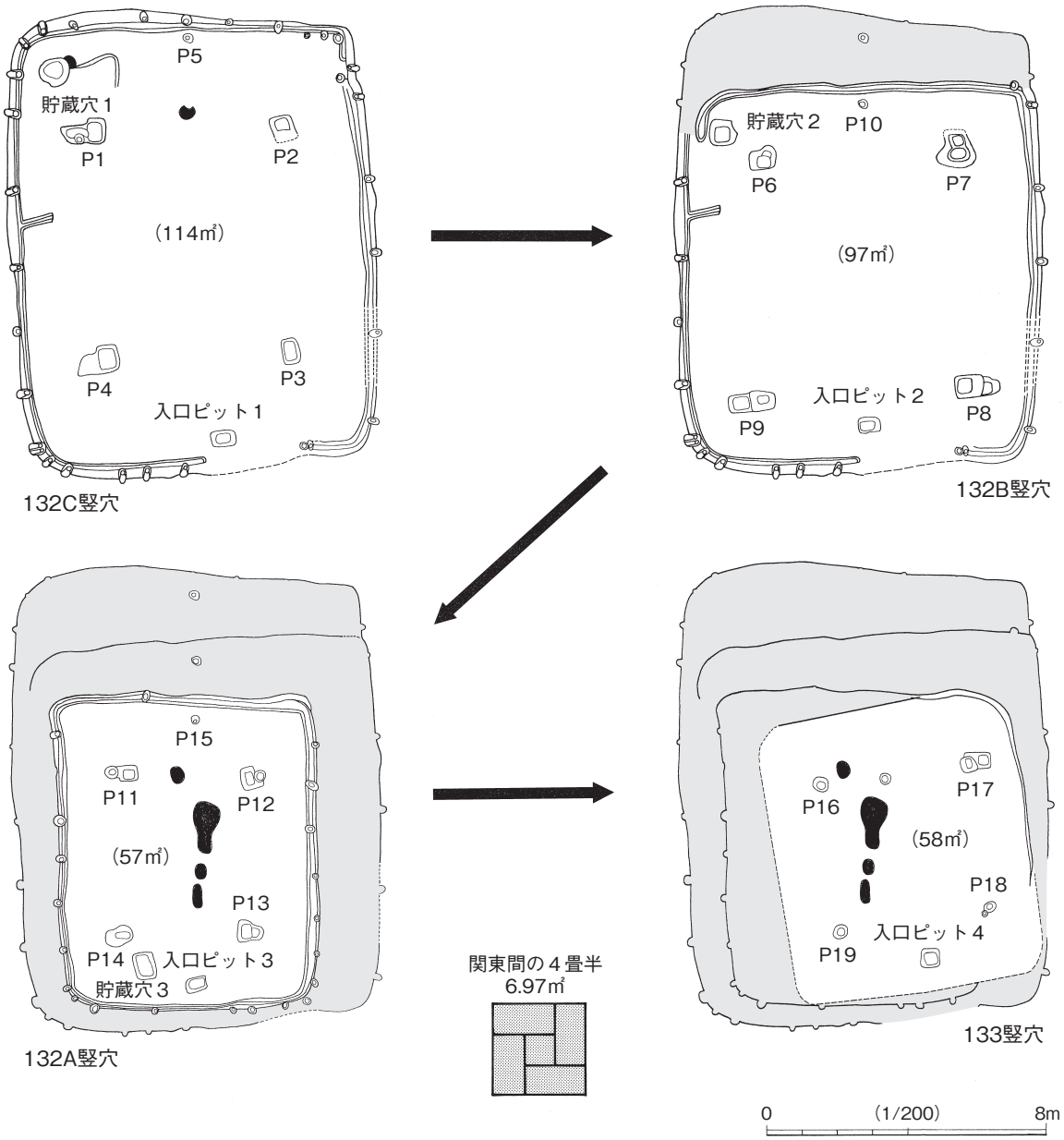
132Ｃ住居

最初に造られた大型の竪穴です。長軸の長さ13.0m、短軸の長さ10.8mの長方形で、北東に向かう傾斜の強い斜面に掘り込まれていました。南のコーナーの壁は床から検出面までが1.2mほどの高さがあり、到底這い上がることはできません。逆に北側コーナーの壁は0.3m程度しか残っていませんでした。壁に沿って溝が巡り（周溝とか壁溝と呼ばれている）、溝の中には等間隔に小さな穴が掘られています。西側の壁には、溝の中に掘られた穴から縦に延びた溝が壁にくっきりと認められます（写真右側の壁）。千葉県内の遺跡ではこのような施設を伴う竪穴は少なく、集落跡を掘っても限られた竪穴しか発見されません。この壁に穿たれた溝は壁の崩落を防ぐための養生をした杭の可能性があるほか、壁が立ち上がる構造の上屋であったことを示しているのかもしれません。すなわち、竪穴の屋根が地面と接しているのではなく、地面から壁が立ち上がりその上に屋根が載る構造になっていたかもしれないのです。北西隅には直径約90㎝の丸い貯蔵穴１が掘られています。４つの柱穴は長辺約80㎝、短辺約60㎝の長方形を呈しており大型住居に特有の四角い規模の大きな柱穴です。P1・P4の柱穴は西側に形が広がっており、一般的には、柱の抜き取りの際に柱を倒したことによって発生した変形と考えられます。南側壁際に梯子を差し込むための入口ピットがあります。炉はこの竪穴の後に132Ｂ竪穴へと建て替えられた際に壊されてしまっています。北西隅に認められた床が焼けた焼土跡は炉ではないようです。炉Ａは132Ｂの床に僅かに認められたものですが、この竪穴の炉であった可能性があります。北側壁の中央近くにピットP5があり、棟持柱の存在を窺わせるものです。このP5は、その後も建て替えの際にP10さらにはP15へと位置を変えながら設けられています。竪穴に欠くことができない共通の機能を果たしたピットだったのでしょう。

この竪穴のものと判断できる遺物は微量で、建て替えの際に片付けられてしまったのでしょう。第３図に示した土器は小型の壺で古墳時代前期と考えられます。

132Ｂ住居

長軸の長さ10.9m、短軸の長さ10.6mの長方形で、132Ｃ竪穴の壁をほぼ再利用していますが、北側辺だけを縮めて溝を掘り直し、規模を縮小して建て替えられています。床面の高さは、古い竪穴とほぼ同じですが、建て替えに伴い、場所を変えて新たな柱穴が掘られています。P7～P10の柱穴がこの竪穴のものと考えられます。詳しく見ると柱穴はそれぞれ２つのピットからなっており、P6・P7は南北方向にずらして、P8・P9は東西方向にずらして掘り直されていることから、竪穴の床面積はそのままに柱の入れ替えが行われています。このことからこの竪穴では改築が行われたことがわかります。面白いことに柱穴の形態は132Ｃと同様に長方形をしていますが、その長辺が南北から東西に変更されています。入口ピットは改築しても同じピットが使われたようです。西壁から間仕切り用と見られる溝が伸びていますが、132Ｃ竪穴のものかもしれません。壁柱穴は一部が再利用されている可能性がありますが、北壁沿いでは全く見つかっていません。貯蔵穴２は、132Ｃ竪穴と類似した位置に設置されています。132Ｃ竪穴のP5と同様に北壁中央にP10のピットが掘られています。132Ｃ竪穴が大きな竪穴



第４図　大型竪穴の建て替えの経緯

でしたから、相当に大きな建て替え工事が行われたのでしょう。132Ｃで使われた建築材は、新たに建てられた132Ｂでもかなりの量が再利用されていると思われます。

この竪穴のものと判断できる遺物は少なく図示されたものは僅かに２点です。ハケ目調整の台付甕などです。古墳時代前期の土器と考えられます。

132Ａ住居

３棟目のさらに規模を縮小して建て替えられた竪穴です。長軸の長さ9.0m、短軸の長さ7.4mの長方形です。132Ｃ竪穴と相似形ですが、規模が大幅に縮小され、床を前竪穴よりもさらに約40㎝も掘り下げています。明らかに132Ｃ竪穴あるいは132Ｂ竪穴の床面を壊して掘り込んでいることから、132Ａ竪穴が132Ｂ竪穴よりも後に造られた竪穴であることは間違いありません。南側コーナーの壁は1.6mもの高さになります。132Ｃ以来の建築部材はこの時も再利用されたのではないでしょうか。P11～P14の柱穴が場所を変えて新たに掘り直されています。132Ｂ竪穴と同様に各柱穴は２つのピットからなり、この竪穴の床面積を保ったまま柱の入れ替えが行われ、改築されていることが分かります。面白いことに柱穴は、長方形から円形の柱穴に変わったようです。この竪穴には壁際に巡る溝の中にピットがあります。後で触れますが、このピットは壁の養生にどうしても必要だった可能性があるほか、立壁の側柱の役目も果たしていたかもしれません。炉が

複数発見されていますが、最も大きな炉Ｂは次の133竪穴で使われた可能性が高いようです。位置的には本住居の炉としてもおかしくないことから同じ位置で継続して炉が使用されたのかもしれません。複数ある炉はどのように使われたのかはよく分かりません。

この竪穴のものと判断できる遺物はほとんどありませんでした。覆土のほとんどは、次の133竪穴のものと考えられますが、その中の一部は、本竪穴のものだったかもしれません。

133住居

最後に建て替えられた竪穴ですが、壁が土層断面で確認されただけで、132Ａ竪穴の覆土と混同して掘り抜いてしまっています。北東隅が残っていたことから、土層断面で確認された壁を参考にすれば南北の長さ7.8m、推定される東西の長さ7.2mの隅丸方形ないしは長方形竪穴と考えられます。132Ｃ竪穴から132Ａ竪穴の３棟とは異なり、竪穴の中軸線の方向を西側へずらして建て替えています。それまで長く踏襲されていた竪穴の方位が変わったのです。P16～ P19の柱穴は円形です。入口ピットも新たに掘り直されていると考えられます。炉は中軸線上には発見されていません。炉Ｂがこの竪穴の炉として使用されたのでしょう。床面から焼土や炭化材が発見されましたが、竪穴の使用が終わるときに火を付けて燃やしたか、あるいは何らかの出火が原因で火災にあったのかもしれません。P17は２つのピットからなることから、あるいはこの竪穴も改築されているのかもしれません。

この竪穴から出土した遺物は比較的多かったのですが、土器には明らかな時期差があります。１の小型器台と３～６の高坏、17～19の甕、20の台付甕、21の炉器台は古墳時代前期ですが、７～16の小型壺や甕などは、古墳時代中期でしょう。これについては、この後再度検討しますが、古い土器については一部が、132Ａ竪穴のものかもしれません。

以上が、竪穴群の変遷です。もう一度その経緯をおさらいしてみましょう。最も大きな132Ｃ竪穴が最初に建てられました。次にそれを解体して一回り小さい132Ｂ竪穴に建て替えられ、その後柱を入れ替える改築が行われました。さらにその後、規模を縮小して132Ａ竪穴に建て替えられ、途中で柱を入れ替える改築が行われました。さらにその後、132Ａの竪穴が解体され、竪穴の方向を若干変更して最後となる133竪穴に建て替えられました。したがってこの場所には、４棟の竪穴が建設され、しかも中間の２棟には柱の入れ替えなどの改築が行われたことがわかりました。改築も建て替えの回数に含めると全部で６棟が連続してこの場所に建っていたことになります。いったいどのくらいの期間この場所に建物が建ち続けていたのでしょうか。それを検討する前に、床面積がどのように変わっていったのかを見てみることにしましょう。

床面積の変化

第１表にプラニメータで計測した各竪穴の床面積を示しました。周溝を除く内側の床面積を計測しましたが、床面には炉や柱があるため、実際に使用可能な床面はこれよりも減ることになります。最も大きな132Ｃ竪穴は、114㎡の床面積がありました。平屋で100㎡を超える家は相当に大きな家です。続く132Ｂ竪穴は97㎡、その次の132Ｃ竪穴は57㎡、最後の133竪穴は推定値で58㎡でした。最後の２棟は、あまり床面積が変わらないのですが、最初の132Ｃ竪穴の半分という面積差があります。

私は部屋の広さを畳の枚数で表さないと実感がわかないので畳の枚数で表して見ましょう。畳の寸法には、京間、中京間、関東間、団地間など様々ありますが、千葉県は関東ですから関東間（88㎝×176㎝）の寸法で換算してみましょう[6)]。最も大きな132Ｃ竪穴は74畳、132Ｂ竪穴が63畳、132Ａ竪穴が37畳になります。最も小さい132Ａ竪穴でも37畳ありますからけっこうな広さがあります。少しばかり数字の遊びをしてみましょう。

第１表　各竪穴規模の比較　　関東間1畳：0.88m×1.76m=1.5488㎡

建設の順番	竪穴番号	規　模（長軸×短軸）	床面積	面積比（132Aを100として）	畳換算	収容人員 床面積／半畳	備　考
1	132C	13.0 × 10.6	114	2.0	74畳	147人	最初の竪穴
2	132B	10.9 × 10.6	97	1.7	63畳	125人	柱入れ替えあり
3	132A	9.0 × 7.4	57	1.0	37畳	74人	柱入れ替えあり
4	133	8.3 × 7.2	58	1.0	37畳	75人	最後の竪穴

もし最も大きな132Ｃ竪穴でムラの人たちが祭りの相談をするために集まってきたとすれば何人が収容できるのでしょうか。全員が大人で、座って話をしたとしましょう。半畳もあればよいでしょうか。この半畳＝１人の占有面積で割ると、132Ｃ竪穴は147人もの人を収容することができます。同じように計算すると132Ｂ竪穴は125人、132Ａ竪穴は74人を収容することができます。もちろん炉や柱などがあり、実際にはこの人数を下回ると思われますが、それにしてもたくさんの人達を収容することができる大きな竪穴であることには変わりありません。

竪穴の時代はいつか

これらの竪穴群が造られたのはいつのことなのでしょうか。この竪穴群から出土した遺物が少ないことは、調査中に分かっていました。当然のことですが、建て替えのたびに片付けが行われて、前の竪穴で使われていた道具が残っている方がおかしいくらいでしょう。最後の竪穴である133竪穴にはさすがに残っていましたが、この竪穴が放棄された後にできた窪地に、不要となった土器などが捨てられた可能性も考えられます。出土した土器は少なく竪穴の時期を示していると言えるかどうかも難しいところですが、何とか出土した土器から竪穴群の時期を探ってみましょう。

草刈遺跡の古墳時代前期から中期にかけての土器については、当財団の紀要で詳しく検討されています[7)]。加藤修司さんや白井久美子さんたちの研究成果による土器の時期区分を参考にすれば、133竪穴から出土した土器の中には古墳時代前期草刈Ⅱ期（以下前期Ⅱ期と表記）と古墳時代中期草刈Ⅱ期（以下中期Ⅱ期と表記）のおおよそ２時期の土器が含まれています。竪穴の構造は隅丸長方形を呈し、柱穴の掘り方が小さく、また主軸の方位がそれまでとは変わり、古墳時代中期的な様相を示していると考えられることから、133竪穴は中期Ⅱ期が妥当と思われます。132Ｃ竪穴から出土した鉢は前期Ⅱ期後半でしょうか。132Ｂは台付甕しかなく、難しいところですが少なくとも竪穴の構造から考えると、弥生時代の遺制である楕円形の竪穴ではないこと、また竪穴内の入口ピットと貯蔵穴が弥生的な位置関係にないことから前期Ⅱ期前半以降であることは間違いないでしょう。以上のことから、132Ｃ竪穴が最初に造られたのは古くても前期Ⅱ期前半であり、弥生的な竪穴の形態と内部施設の配置を完全に払拭していることを考えると前期Ⅱ期後半の可能性も捨てきれません。加藤修司さんが示した実年代の指標によれば、前期Ⅱ期前半は４世紀第１四半期（301年から325年）あたりの時期と考えられます。そして133竪穴の廃絶時期を中期第Ⅱ期とすれば、実年代は須恵器の生産が開始された４世紀末（400年頃）と考えられます。従ってこの一連の建て替えが行われた竪穴群の期間は、長く見ても西暦300年代の約100年間となります。132Ｃ竪穴が前期Ⅱ期後半とすれば、４世紀第２四半期（325年から350年）以降となり、一連の建て替えは約70年間くらいに縮まります。この間に規模を縮小した建て替えが２回、同規模の建て替えが１回あり４棟の竪穴が建設され、さらに132Ｂと132Ｃの竪穴には明らかな改築が行われていることから、全部で６棟の竪穴が連続して建っていたと考えられます。単純に100年間を６棟で割ると１棟あたり約16年使用されていたことになります。また70年間とすれば１棟あたり約12年使用されていたことになります。前期Ⅱ期に建設された竪穴は規模を縮小しながらほぼ同じような建物の外観を維持し、古墳時代中期に入ると同じ場所に建て替えたとはいえ、方位も変えた新たな外観の古墳時代中期らしい建物が建設されたのではないかと推測されます。

竪穴の耐久年数について検討した木對和紀さんは、市原市椎津茶ノ木遺跡から発掘された６～７世紀代古墳時代後期の竪穴について「建替えが行われなかった住居跡の存続年数がほぼ10年、建替えが行われた住居跡の存続年数がほぼ20年という結果が導き出される」としており[8)]、市原市御林跡遺跡の古墳時代中期の竪穴についても同様の耐久年数であるとしています[9)]。草刈遺跡Ｅ区で発見された古墳時代前期竪穴群の事例をこれに援用してみると、132Ｃ竪穴が10年、132Ｂと132Ａ竪穴が改築されていることから20年、最後の133竪穴が10年となり通算60年あまり続いたことになり、先に示した１棟あたり約12年とすれば、概ね木對さんの導き出した数値に近いと言えるでしょう。

大型竪穴の類例

草刈遺跡の各調査区からはＥ区と同様の古墳時代前期の大型竪穴が発見されています。その類例を第４図に示しました。さすがに100㎡を超える規模の竪穴はほとんどありません。

Ｄ区189竪穴は、Ｅ区の竪穴に類似した長方形を呈しており、おまけに周溝内にピットが掘られており、Ｅ区の竪穴に似ています[10)]。床面積は72.6㎡です[11)]。

出土した土器は、小型器台や高坏、甕などで、前期Ⅱ期後半の４世紀半ばくらいでしょう。

Ⅰ区432竪穴は正方形の竪穴で、入口ピットが南壁中央にあり、壁柱穴が見つかっています[12]。床面積は83.2㎡あります。出土した土器は、前期Ⅰ期後半と思われますが、竪穴の形態が、弥生的な遺制を残した形態でないことから、出土した土器はこの竪穴の時期を示していないように思われます。

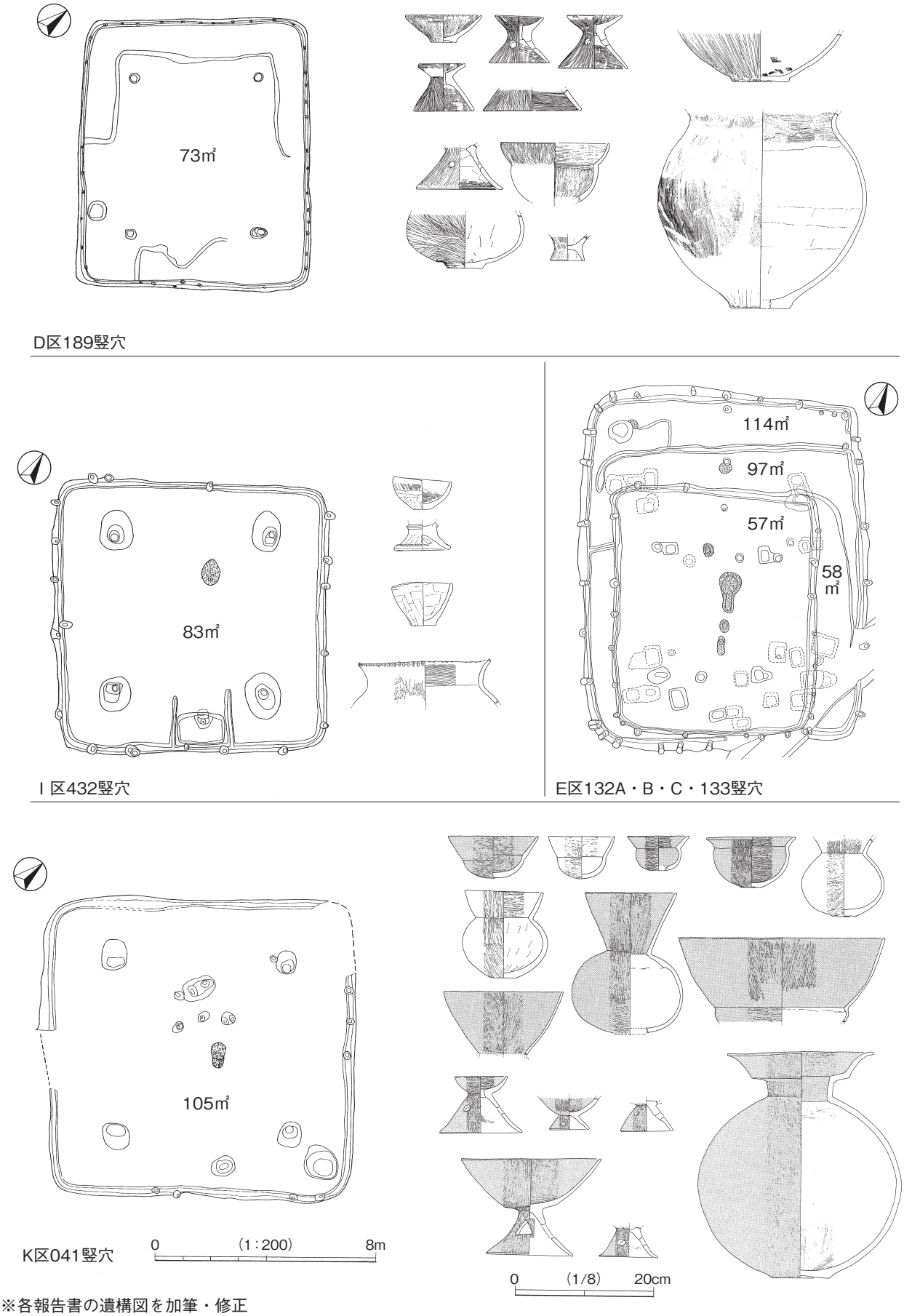
Ｋ区041竪穴は正方形の竪穴で、床面積が105.4㎡もあり、Ｅ区132Ｃ竪穴に匹敵する規模です[13]。周溝内に一部ですが小ピットが掘られています。出土した土器は前期Ⅱ期後半からⅢ期にかけての４世紀後半と考えられます。このほかＬ区143竪穴も80㎡を超える大型竪穴であり、草刈Ⅱ期後半と思われる土器が出土しています[14]。第４図に掲載した竪穴にはそれぞれ方位を示していますが、どれもほぼ同じ主軸方位であることがわかります。これは草刈の台地上のどんな地点にあってもほぼ同じ方位で建てられていることになり、竪穴建設にかかる規範が当時のムラに存在していたことが分かります。

これまでの調査で、広大な草刈の台地では古墳時代前期に1,100～1,200棟の竪穴が建てられいたことが明らかになっており、古墳時代前期の約100年間とはいっても当時としては相当な人口密度だったと言えるでしょう[15]。木對さんの論を借りれば、竪穴の耐久年数が10年ですから10年間に100棟くらいの竪穴が１世紀の間、草刈台地に建て続けられたことになります。たぶんいくつかのムラに分かれて、草刈の台地に住んでいたのでしょうから、大型竪穴は、各々のムラでひときわ目立つ大きな存在だったと考えられます。最も大きなＥ区132Ｃ竪穴の床面積ですと100人を超える人達が収容できたかもしれないことはすでにお話ししましたが、当時のムラの人口が100人にも満たなければ、大型竪穴には、少なくとも大人だけなら全員を収容することができたでしょう。

再びＥ区の大型竪穴について

最後にいくつかの点についてお話しして終わりにしたいと思います。ここに紹介したＥ区の竪穴群についてはいくつかの疑問があります。最初の竪穴の壁は最も高いところで120㎝余りありました。当初の竪穴ならローム層を掘り込んでいましたから、土壁はしっかりしていたと考えられます。しかし縮小して建て替えた132Ａ竪穴の場合には、壁を新たに築き直さねばなりません。普通に考えれば、よほど敲き締めて壁を築かなければ、建て替えたとしても客土して築き直した土壁では崩れてきてしまうのではないかと心配になります。土層断面に壁の線が確認できましたが、その土層断面で観察された土の硬さは、版築のように突き固められたような締まりは感じられませんでした。いったいどうやって崩落しやすい壁を土留めしていたのでしょうか。石野博信さんは竪穴の土壁について次のように述べています。「普通、竪穴住居には壁がない、といわれている。それは、壁が立ち上がって屋根を支えるいまのイエのような形がない、という意味であるが、かなり早くから壁があるらしいことがわかってきた。竪穴住居の内側は、土壁状になっている。囲板や囲柴（竪穴住居内側の土留め施設。板や柴をあてて杭でとめる）を設けて土留めとするのは弥生時代後期の大阪府茄子作遺跡や神奈川県三殿台遺跡などであり、その後も継続する」[16]。132Ｂ竪穴から132Ａ竪穴への建て替えでは埋め戻しの軟弱な土壁でしたから、壁を板や柴をあてて杭で止めるには相当な養生が必要だったのではないでしょうか。132Ａの西壁の溝にはしっかりとピットが並んでおり、軟弱な壁の養生がどうしても必要だったことを窺わせています。

もう一つ、この竪穴は、北東に向かう斜面に建てられています。当然のことですが、山側は土壁が高くなり、谷側は土壁の高さがないことになります。どうして不安定な斜面にこんな大きな建物を建てたのでしょうか。一つの理由として考えられるのは、この時期壁立ちの建物になりつつあったとすれば、これだけ大きな建物なら壁を造るのも大変だったでしょう。斜面に造れば山側の約半分は高い土壁ですから、壁を造る手間が省けたのではないでしょうか。また、これだけ大きな建物だと屋根が重く、軒先を支持する強度のある構造にしておくのも大変だったでしょう。ですから、山側の半分ほどの軒先が地面についていれば、地上に立ち上がる側壁が軒先にかかる重量を全て受けないで済むことになります。では谷津側の土壁が低い方はどうなっていたのでしょうか。軒先が全て水平だとすれば、１ｍ以上の立壁が必要になります。あるいは土盛をして土壁を築いており、立壁がわずかで済んだ可能性もあります。石野博信さんは「立壁を具体的に見ることができるのは家形埴輪であり、古墳時代のはじめからある。岡山県女男岩遺跡の家形器台は最も古い例であり」「家形埴輪の壁のあらわし方には、横線を入れる板壁、網代風（薄くけずった竹や葦などで編んだ



※各報告書の遺構図を加筆・修正

第５図　草刈遺跡から発見された古墳時代前期大型竪穴の諸例　（竪穴1/200、土器1/8）

もの）の編壁、横線に断続的刷毛を描く草壁などがある。」と述べ、立壁の構造が多様であったことを指摘しています[17]。ことによるとＥ区の竪穴は、山側が土壁で谷側が立壁だったのかもしれません。

さらにもう一つ重要なことを忘れていました。なぜ規模を縮小する建て替えが行われたのでしょうか。しかも同じ場所で。通常であれば耐用年数を過ぎれば、新たな場所に新築するでしょう。しかし、この場所にこだわりがあったのです。最初に建てられた132Ｃ竪穴から次の132Ｂ竪穴に建て替えるときは、４辺の壁の北側だけが狭められ、－14㎡の縮小にとどまっています。従って建物の外観はさほど変わっていなかったのかもしれません。先に説明したとおり、132Ｂ竪穴の４つの柱穴は新たに掘り直されていることから、一度基礎までの解体が行われ、４つの柱を新調して建て替えたものと考えられます。その際使える資材はできるだけ再利用されたのでしょう。132Ａ竪穴への建て替えは、床面積が約半分ですから、大幅な縮小が行われています。建て替えの際は、基礎までの解体が行われ柱も新調して、新たな柱穴に差し込まれたのでしょう。その際、縮小された規模になるまで周囲の埋め戻しが行われたはずです。建物の外観は、竪穴の規模が小さくても当初の竪穴と相似形であることから、似た外観であったと考えられます。人が入ることを考えれば床面積の縮小率に比例して建物の高さが低くなるとことはあり得ません。それは現在我々が住んでいる町並みを見てもそのことはすぐにわかります。様々な建坪面積の家が建ち並んでいますが、建坪の面積が小さい家が、周りの家に比して高さが低いかといえばそんなことはありません。建物の高さに関しては断面寸法までが大幅に縮小されることはないのです。とは言っても床面積が減れば、必要な建築資材が減ることは間違いありません。当然それに伴い建設に関わる要員の総数も減ることになります。従って、Ｅ区の竪穴が縮小された原因の一つには、建物の老朽化に伴いやむを得ず建て替えをしなくてはならなくなった際に、132Ｃ竪穴に携わったような建設要員の確保が難しくなったからからかもしれません。確保できる建設要員の数に合わせた竪穴規模になるのは当然のことです。このムラの人口が減ったのでしょうか。この点は、草刈遺跡のこの時期の竪穴群についてさらに詳しい分析が必要となりますが、それについては今後の課題とせざるを得ません。

建て替えられていった竪穴は、どのように使われていたのでしょうか。大きさの違いを除けば一般の竪穴と施設の配置などには違いがありません。「住居」であれば、よほどの人数がそこで暮らしていたのでしょうか。第５図をもう一度見ると、大型竪穴だからそれに合わせて日常の煮炊きを行う炉が大きいかと言えばそうではありません。実はそこに解き明かさなければならない大型竪穴の秘密が隠されているのではないでしょうか。一般の竪穴と同様の施設を備えてはいますが、日常的な生活を一定のメンバーで続けて行くには、やはりあまりに竪穴が大きすぎるのではないでしょうか。特異な存在として大型竪穴を維持する事ができた特別な人々がいたとすれば、やはりそれはムラを統括する者の存在を考えないわけにはいきません。その人物の日常的な生活空間としてこの竪穴が使われていたとすればある意味では「住居」と呼ぶこともできますが、別な呼び方をすれば「居館」[18]として位置づけることができるのかもしれません。すなわち、そこに住んでいた人たちの階層（ムラにおける社会的地位の序列）がより高い位置にあったと考えることができるのかもしれないのです。

草刈遺跡からは、この竪穴が位置しているムラや草刈の台地に展開した幾つかのムラを統括していた人物の存在を示す、いかにも「居館」と認識できる遺構群は、ほぼ全域の調査が終了しているにもかかわらず全く見つかっていません。しいて階層の差を遺構に求めるとすれば、竪穴規模の大小くらいでしょう。一方で、草刈台地の広い平地には古墳が造られ始めていました。広い墓域が台地を占有し始めていたのです。草刈台地にその古墳群を造らせるだけの力を持った階層の人たちがいないはずはありません。とすれば、Ｅ区で発見されたこの大型竪穴などは、古墳群を造らせた人物あるいはその一族の建物であったとしてもおかしくありません。

最後にもう一つ。そもそもＥ区とされた区域は、調査の応援に行ってわかったのですが、北東に向かう斜面のため、冬は昼を過ぎないと日が当たらない寒い場所なのです。私だったら家は建てないでしょう。あるいは、北側にある谷津で水田耕作をしていたため、できるだけ近いところに居住地を設けたのかもしれません。このムラの人達は、よほどの理由があったから北東向きの斜面にムラを維持していたのでしょう。広い草刈台地とは言え、そこにはムラ同士の微妙な力関係があったのか、食料生産に関わる利便性が優先されたのか、残念ながらそれはよくわかりません。

今年度末には草刈遺跡の一連の報告書が完結します。それによって、遺跡の全域を対象としてそこに展開した集落の動態を解き明かすことができるようになります。ここに取り上げた竪穴は数棟にすぎませんが、草刈の台地に展開した古墳時代前期のムラの中心的な存在であったことは容易に想像することができます。その竪穴を使用した人たちが、どのような階層の人たちだったのか、検討すべき課題は数多く残されています。

小稿を書くにあたり下記の方々から貴重な助言と文献の協力をいただきました。記してお礼申し上げます。
金出ミチル　白井久美子　島立桂　黒沢崇　木原高広
渡辺修一　山口典子（敬称略）

注

1）渡辺修一　1992　「「竪穴住居」か「竪穴建物」か」『研究連絡誌』第34号　㈶千葉県文化財センター

2）今風に言えば、建物の基礎部分は残して部分的に改築、修繕、増築などをする和製英語の「リフォーム」にあたる。英語のreformは広く「作り直す」の意であり、日本語の「住宅リフォーム」に相当する語はRenovationと言った方がよいかもしれない。また、建築業者の中には「リフォーム」ではなく、「家を作り直す」との意を込めて「リホーム」（ReHome）としているところもあるらしい。

3）小林清隆ほか　2006『千原台ニュータウンⅩⅣ－市原市草刈遺跡（Ｄ区・Ｅ区）－』㈶千葉県教育振興財団

4）草刈Ｆ区については、平成24年度末に報告書が刊行される予定であり、この報告書をもって千原台ニュータウンにおける全ての整理・報告が完結する。

5）蜂屋孝之ほか　2009『千原台ニュータウンＸＸＩ－市原市川焼台遺跡－』㈶千葉県教育振興財団

6）昨今の１畳の平米数については、首都圏不動産公正取引協議会による不動産ルールで決められた１畳＝1.62㎡の方が一般化している。

7）加藤修司　2000「土器編年案」『研究紀要』21　㈶千葉県文化財センター
　この中で上総地方の弥生時代後期末から古墳時代前期の土器編年について、草刈遺跡から出土した土器をもとに３期に区分している。草刈Ⅰ期は、弥生時代後期末、草刈Ⅱ期前半・後半・草刈Ⅲ期を古墳時代前期相当としている。ここでは草刈Ⅱ期・草刈Ⅲ期をそれぞれ前期Ⅱ期・前期Ⅲ期と呼ぶことにする。
白井久美子　2012「集落出土土器等の様相」『研究紀要』27　㈶千葉県教育振興財団
　この中で古墳時代中期を６期に区分している。ここでは中期Ⅰ期から中期Ⅵ期と呼ぶことにする。

8）木對和紀　1992「集落の変遷」『市原市椎津茶ノ木遺跡』㈶市原市文化財センター
　木對のいう「建替え」は、最初にお断りした用語の「改築」に当たる。

9）木對和紀　2008「御林跡遺跡５世紀代の土器の変遷」『市原市御林跡遺跡Ⅱ』市原市教育委員会

10）注３）に同じ

11）1/100の縮尺図をプラニメータで計測。その他の大型竪穴も同様に計測した。

12）小高春雄　2011『千原台ニュータウンＸＸⅥ－市原市草刈遺跡（I区）－』㈶千葉県教育振興財団

13）小林清隆ほか　2007『千原台ニュータウンＸⅦ－市原市草刈遺跡（Ｋ区）－』㈶千葉県教育振興財団

14）小林清隆ほか　2010『千原台ニュータウンＸＸＶ－市原市草刈遺跡（Ｌ区）－』㈶千葉県教育振興財団

15）白井久美子　2012「集落出土土器等の様相」『研究紀要』27　㈶千葉県教育振興財団において、2011年の集計による草刈遺跡の古墳時代前期竪穴の数は1,158棟にもなるという。

16）石野博信　1993『考古学　その見方と解釈』下　筑摩書房（『古代住居のはなし』吉川弘文館2006所収）

17）注15）に同じ

18）一般的には古墳時代の豪族の居宅のほかその周囲の大型高床建物・祭祀址・製作址などの遺構群が濠・柵によって区画された範囲をいう場合が多い。草刈遺跡の場合、ほぼ全域の発掘調査を実施したものの、濠・柵などに囲まれた、明らかにそれとわかる遺構群は発見されていない。古墳の造営を行った豪族層の居宅を、発見された竪穴群の中のどれに求めるのかは、これからの研究課題である。

その他参考文献

宮本長二郎　2001「原始・古代住居の復元」『日本の美術』第420号　至文堂

宮本長二郎　1998「平地住居と竪穴住居の類型と変遷」『先史日本の住居とその周辺』奈良国立文化財研究所シンポジウム報告

高橋一夫　1990「東日本の集落」『古墳時代の研究』第２巻　雄山閣